

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第29号 2019.3.31

## 宗教心理学研究会

*Society for the study of psychology of religion*

### 目次

第15回研究発表会報告	報告 藤井修平	1
日本心理学会第82回大会シンポジウム		
「宗教心理学的研究の展開(15)」に登壇して	木村真利子	7
「働く人のスピリチュアリティ」が拓く宗教心理学の新たな展開に登壇して	今城志保	8
美しきフクロウ	ムスリン・イーリヤ	9
宗教心理学的研究の展開(15)感想記	白岩祐子	12
我が国における宗教心理学の独自性を目指して	末田啓二	13
コラム 関西地区勉強会だより NO.4—新しい時代を迎えるにあたって—	中尾将大	15
事務局からのお知らせ		17

## 第 15 回研究発表会報告

日本心理学会第 82 回大会公募シンポジウム:宗教心理学的研究の展開(15)

—宗教心理学的研究の最前線—

報告 藤井修平(東京大学大学院)

2018年9月25日から27日にかけて仙台で開催された日本心理学会第82回大会では、宗教心理学研究会による企画として公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(15)—宗教心理学的研究の最前線—」が行われた。15回目を数えるこのシンポジウムに私も話題提供者として参加させていただいたので、その様子を報告したい。

今回は、心理学の分野から2名(木村・今城)、宗教学の分野から2名(藤井・ムスリン)の話題提供者を招いてのシンポジウムであった。発表の内容も両分野を架橋することが意図され、情報交換の場として非常に有意義なものになったと

認識している。以下にその発表内容について記述しよう。

### 1. 趣旨説明 松島公望(東京大学)

はじめに、松島先生による趣旨説明が行われた。その内容はこれまでの宗教心理学研究会の歩みを振り返る興味深いものだったゆえに、ここで詳しく紹介したい。松島先生によると、宗教心理学研究会が目指すのは実証的な宗教心理学であるが、それは今まで「知らない・見つからない」「議論されない」「交流も生まれえない」「継承されない」「沈滞する」そして「知らない」に戻るといふ、悪循環に支配されていたという。その原因は

何より学術雑誌や文献が存在しないからで、宗教心理学的研究は1900年に日本ですでに行われていたが、2011年の『宗教心理学概論』(ナカニシヤ出版)の前は、1946年の今田恵の『宗教心理学』(文川堂書房)しか概論書が存在しなかった。そうした状況を打破するために始められたのが宗教心理学研究会で、その成果として上記の図書に加え『宗教を心理学する』(誠信書房)が存在することは皆さんご存知の通りである。そして、宗教心理学研究会が今後どう進むべきかについて松島先生が述べていたのが、それぞれの研究テーマと宗教心理学がどのような形で「連携・協働」できるかということである。それを行うために、今回のシンポジウムが組まれたと説明された。すなわち、心理学と他分野の接点についての先行例に着目し、それを包括的に把握することで、「知らない」という状況を打開するというのが主な目的だといえる。最後に今後の展望として提示されたのが、「概念」「実証」「現場」の連携である。私の理解では、「概念」の箇所は宗教学や哲学が担当し、宗教に関する視点や理論を提供する。それを心理学の各分野が実証的な方法でテストする。そしてその成果をもとに、福祉や教育の現場に応用するというプランであり、まさに各分野の長所を活かした協働が企図されているように思われる。私も宗教学の分野から、このような形の連携が実現するように協力していきたいと考えている。

## 2. 話題提供 木村真利子(立正大学)『『破壊的カルト』研究の動向』

最初に登壇したのは、立正大学の木村さんである。彼女はカルトの心理学的研究で著名な西田公昭先生のもとで学んでいる。順を追って内容を見ていくならば、まずは「破壊的カルト」とは何かについて、定義の問題が提示された。「カルト」は日常的にも使われている用語だが、とりわけここでは宗教団体の脱会者やその家族が批判的な意味で用いる反社会的団体としてのカルトを、「破壊的カルト」として特筆して注目がなされた。破壊的カルトは、生命の破断、性的虐待、暴力的布教、児童虐待、金銭収奪、正体隠しの詐欺的

布教の6つおよび信者の心理操作を行う点において社会的に問題となりうるものである。この際に疑問となるのが、どのような団体を破壊的カルトとみなしてよいかである。これには、そうした社会問題を起こすという実態面からの規定に加え、そうした要素がどのくらい見られるかについての「集団健康度」を計る尺度が存在する。破壊的カルトに対する既存の研究は、国際学会「International Cultic Studies Association」を中心にさまざまなテーマで行われているが、発表は其中でも、カルトが行う問題のある行為としてたびたび指摘されているマインドコントロール(MC)に着目して話が進められる。MCは「他者が自らの組織の目的成就のため、本人が他者から影響を受けていることを知覚しないあいだに、一時的あるいは永続的に、個人の精神過程(認知、感情)や行動に影響を及ぼし操作すること」と定義され、6つのプロセスが特定されている。西田先生はこの概念の理論化を進めており、集団内のビリーフシステム(BS)の形成と維持に影響を及ぼす数々の心理的技術がMCで使用されていることが明らかとなっている。続いてそうした見地に基づいた木村さん自身の3つの研究が提示された。1つ目はMCの技術が信者に与える影響について、議論のある宗教団体とそうでない団体のメンバーを調査したもので、BSの形成と変容、BSの強化と維持、MCの技術に関する質問が行われている。その結果、因子分析により6因子が抽出され、そのほとんどにおいて議論ある団体群とそうでない団体群の間で有意差が見られた。さらにMC技術を独立変数として重回帰分析を行うと、BSの形成・変容とBSの維持・強化の双方の従属変数に対して影響が見られた。この研究によりカルト団体の活動内容の差異は明らかになったが、さらに信者側の要因に焦点を当て、カルトに入りやすい人の特徴に関する調査が行われている。そのために、2つ目の研究ではMCに対する脆弱性尺度の開発がなされた。その尺度は3つ目の研究で用いられ、議論のある団体、ない団体、宗教歴なしの3群に対してMC脆弱性尺度を含めた設問が行われた。因子分析の結果、議論のある団体のメン

バーは全体平均に加え自己・社会への意識の高さ、承諾誘導、カリスマ、知識のなさの因子が有意に高かった。個人的要因の BS に対する影響の分析では、オカルト嗜好性は BS の形成・変容に影響するが、宗教的関心の因子は BS の形成や維持に対してマイナスの影響が見られた点が特徴的であった。最後に今後の展開として、カルトからの脱会プロセス、カルトの 2 世の問題、テロリズムとの関連についての研究が求められていることが語られた。

木村さんの発表は以上の通りだが、ここで今回のテーマ「連携」と関連したコメントを述べさせてもらいたい。カルト問題は宗教学においても重要なテーマで、とりわけ近年はオウム真理教代表らの死刑執行もあり、大いに注目が高まっているといえる。この主題に関しては研究機関の宗教情報リサーチセンターのメンバーがいくつか研究を行っているが、そのセンター長の井上順孝がたびたび指摘しているように、宗教学全体としては積極的な研究にこの足を踏んでいる現状である。それはなぜか。ある程度推測になるが、理由の一つは宗教学が宗教のポジティブな面に注目するあまり、カルト問題を重要なテーマだと認識していないことである。木村さんの研究は、この現状に風穴を開けてくれるもののように思われる。そこには確かな方法および理論と、実際の宗教団体から得られたデータが存在しているためだ。宗教学の研究者に対しても、こうした先進的な研究をできるだけ参照するよう働きかけたい。

### 3. 話題提供 今城志保(リクルートマネジメントソリューションズ)「職場におけるスピリチュアリティ」

続く発表者の今城先生は産業組織における心理学の専門家であり、職場のさまざまな問題に心理学的に取り組まれている。今回は職場のスピリチュアリティがテーマで、現在欧米はスピリチュアルブームが起こっているという。それは、価値観が多様化している中で精神的なよりどころが求められていることや、東洋思想への興味が原因として挙げられている。そうした状況で、「スピリチュアルワークプレイス」が重要視されており、研究や

実践も大いに進められているという。それはなぜかということ、職場で働く人がスピリチュアリティを高めることで、幸福感が向上し、働く意味や意義が得られ、周囲との一体感も強まるとされているからである。またスピリチュアリティは特定宗教とは関わらないために、多様性が必要とされる職場において宗教よりも適しているという理由も挙げられている。スピリチュアルワークプレイスは企業パフォーマンスの向上に繋がるので、経営者も積極的に導入を試みているようだ。そうしたテーマに関して先生が行った研究は、日本で働く人にとってのスピリチュアリティの実態を明らかにするために、日本の職場とそこで働く人のスピリチュアリティを 1 千人以上を対象に調査している。職場スピリチュアリティについては確立した定義はないが、「自己超越の感覚」「仕事为天職であるとの感覚」「他者との連帯感やメンバーシップ」の点が多く、尺度で共通しており、それを中心に尺度が構成されている。それに加え、一般的な宗教性／スピリチュアリティと、主観的幸福感についても質問が設けられている。その結果は興味深いもので、職種によって分けたところ、管理職や営業・販売職、対人系職業に就いている人は職場での真正性の要素も、職場スピリチュアリティの要素も高く、他方で事務職や運輸・保安、現業職は低いという差が現れた。また幸福感との関係では、職場スピリチュアリティが最も強く関連し、一般的宗教性も弱い関連があった。共分散構造分析によると、それぞれの要素間に関連が見られるが、とりわけ一般的な宗教性が高い人は、職場でのスピリチュアリティが高く、さらに主観的幸福感も高いという関連が明らかになった。さらに仕事の特徴による影響は、自らの仕事の裁量度や責任、人との接触の度合いが職場でのスピリチュアリティを高めると分析された。その他、神秘的な力をいつ感じるかについての自由記述の回答もまとめられており、科学や合理的説明を超えた出来事の原因帰属という回答が最多であった。最後に結論として、事前の予測に反して、仕事に意義を感じていない人ほど宗教性の影響が強くなるということが確認されなかったことが課題であり、さらに一般的な宗教性と職場での

スピリチュアリティの関連は欧米においてもこれまで研究されていないために、今後の発展の余地が大いにあることが指摘された。

今城先生の発表についても、宗教学からの視点として感想を述べたい。第一に気付いたのは、宗教学においては一般の職場というものは、これまでほとんど考慮されていなかったことである。それは、宗教として扱われるのは実際の宗教団体か、あるいは「宗教思想」かのどちらかで、一般人のスピリチュアリティは重視されないという宗教学者間の傾向のゆえである。しかし今城先生は見事に職場のスピリチュアリティを抽出しており、職種間で差が出るということも明らかにしている。これは宗教学にとってはまったく未知の研究となりうるように思われる。実際に、現在進めている米国への仏教の普及の研究では、多くの経営者が禅やマインドフルネスに関心を持ってきたことが明らかになっている。また、職場のスピリチュアリティの研究によるパフォーマンスの向上という、研究の応用の面に関しても当発表は示唆的であった。先ほど記述した趣旨説明でも「現場」という領域が提示されていたが、一般に人文学系の研究者は自らの研究が何に使えるかということに疎く、むしろ忌避する傾向がある。しかし現場の領域は無視できないものであり、そうした応用を行う方法を心理学から学べるのではないかと考えている。

#### 4. 話題提供 藤井修平(東京大学)「宗教認知科学の可能性」

後半部は宗教学の分野からのゲストである。まず藤井が、現在欧米で進められている認知科学と心理学、宗教学を複合した新分野である「宗教認知科学(CSR)」の現状について報告を行った。最初に説明したのは、宗教学とはどんな分野かについてである。宗教学は宗教という対象を中心にした分野であり、心理学とは異なり特定の方法が確立されているわけではない。その代わりに、宗教学は仏教やキリスト教などの組織宗教に限らず、迷信や神話、民間信仰や慰霊など宗教的な特徴を共有する幅広い対象を扱うことが可能であり、むしろスピリチュアリティに対する研

究も数多く存在してきた。心理学、とりわけ実証的な手法を有する心理学と宗教学との結びつきはこれまで弱かったが、近年徐々にその結びつきが構築されつつあり、その一例が CSR である。CSR は 1990 年代に、科学的・実証的な宗教の研究を意図した人類学者と宗教学者が、認知科学や心理学の見地を取り入れることによって成立した。その際の創立者として挙げられるのが P・ポイヤーや T・ローソン、H・ホワイトハウス、J・バレットであり、彼らは仮説を立て、実験によってそれをテストするというまさに実証的な宗教心理学を行ったのである。その中でも、ポイヤーによる「直観的に構成された世界についての生物的・心理的・物理的予測を裏切る反直観的概念は記憶と伝達されやすい」という仮説のもとに行われた実験はインパクトが大きく、何度か再現も行われている。その他、宗教的教義を教え込まれている人でも、とっさの状況下では教義に反する直観的思考に基づいた宗教観を示しやすいとする「神学的インコレクトネス」や、ピアジェの研究を継承した子供の目的論や死後の生の存続についての信念が、これまでの主な CSR の成果である。その後 CSR は学術誌を刊行し、学会を設立するなど、国際的な知名度は徐々に高まっている。CSR の現状を整理すると、CSR には方法論として「心理学的手法」「宗教学的手法」「神経科学的手法」「進化生物学的手法」「デジタル・ヒューマニティーズ」が包含され、相互に関連した研究が行われている。とりわけ心理学的側面に目を向けるならば、その研究テーマは、「宗教を生む心的メカニズム・バイアス」「宗教集団に所属することへの影響」「実際の宗教集団のフィールド実験」「子供の示す傾向性と宗教の関係」「特定の精神疾患と宗教の関係」「宗教と健康」「宗教と無宗教の比較」の 7 つに大別することができる。最後に心理学にとっての CSR の意義として、宗教学上の多数の仮説を利用できること、日本における調査は再現性の危機の改善に貢献できること、上述の隣接分野における手法や成果を参照できること、研究を行う上で常に課題となる宗教の定義問題に対してこれまでの宗教学的知見を生かせることが挙げられた。

本発表で意図したことは、心理学による宗教研究が可能であり、かつそれには大きな意義があることを示すことである。日本国内においては宗教心理学が盛んでないことには触れたが、その原因の一つとして、宗教は「教団」が行うものという固定観念が存在することが挙げられる。むしろ教団も宗教の代表として有意義ではあるが、日常の何気ない迷信的行動や寺社仏閣への参拝、あるいは慰霊行為も宗教の構成要素である上に、そうした行動には確かな共通点が存在するのである。また一方では、CSRのボイヤーなどは擬人観や心の理論など宗教以外の領域にも関わる心の傾向性が、宗教の形成に大きな役割を果たしていることを指摘している。宗教学の強みはこれらの個々に扱われがちな要素を宗教の概念のもとに関連性を考慮しつつアプローチできる点にあると考えており、それは心理学的研究に対しても資するものがあるだろう。

##### 5. 話題提供 イーリヤ・ムスリン(日本大学)「近年の北米心理学における宗教研究の現状と課題」

今回最後の登壇者が、同じく東大で宗教学を学んだムスリン先生である。以前行われた本研究会での発表で語られたように、彼は北米の死と宗教の関係を取った心理学を広範に分析し、その問題点を見出している。そのような心理学の潮流として、恐怖管理理論(存在脅威管理理論)、意味管理理論、宗教の合理的選択理論、愛着理論、進化心理学が挙げられており、それぞれについて問題点、とりわけキリスト教的世界観が色濃く現れている箇所が取り上げられている。恐怖管理理論は宗教に死後の生を約束し、死の恐怖を低減させる機能を見出し、意味管理理論は宗教が人々に究極の意味を与えることによって、困難を乗り越え、個人の成長や良好な健康を促すとみなしている。合理的選択理論もまた宗教は普遍的な不死への欲求を満たすものと想定し、愛着理論は信者の神との愛着関係に注目を注いでいる。これらの4理論はどれも一定の支持を集めているが、ムスリン先生によると、これらの理論は宗教とは何かに関する隠れた前提や規範を

含んでいるが、それにはキリスト教的バイアスが反映されており、そのせいで宗教的信念の多様性を見逃しがちであり、宗教の精神的・身体的健康への好ましい効果のみを強調する傾向がある。たとえば、愛着理論の無条件の愛を提供する理想的な愛着対象者としての神という概念は、他の宗教に含まれる鬼や悪霊などの超自然的存在を考慮していないのみならず、人間に対して両面的な態度を持つ神さえ見落としているかのように見える。また意味管理理論と宗教の合理的選択理論においては、唯一神や不死、天国といった信仰を含んだ宗教がより真正なものとなされている。すなわちこれらの理論は、宗教という非常に幅広い対象を扱いながらも、キリスト教をそのプロトタイプとし、キリスト教に多く含まれる要素のみを考慮するという自文化中心性を内包していると同時に射程が限られているというのがムスリン先生の分析である。他方で、進化心理学は藤井発表のCSRと重なるところが多いが、こちらは例外的に、むしろ無神論的な傾向が見られるとされている。また、これらほぼすべての理論に共通するのは、死という多面的な現象に対する見方が限定的だという点である。例として進化心理学は、適応の観点から死者に対する認知的反応を説明するが、死が人間の生き方にもたらす影響や死についての宗教思想の説明は不十分である。他方で恐怖管理理論などは、宗教の死の恐怖を緩和する機能を強調するあまり、宗教が死への不安を煽る効果については十分に参照がなされておらず、宗教のポジティブな側面にしか目が向けられていないといえる。

結論として、北米心理学には神学的要素を含んだものと無神論的なものとの両極端が存在するという指摘と、これらに含まれる自文化中心性から脱却するために、宗教の多様性を強く意識する、宗教の理論を提示する際に自らの立場を考慮し、バイアスをできる限り排除する、死に対する態度を論じる際にも多面的な視野を持つという提案がなされている。そして、最後に、ムスリン先生は会場の日本人心理学者に、宗教を対象とする際、北米心理学による宗教研究に見られるようなバイアスをそのまま輸入することなく、日本

の宗教的・文化的文脈により適った尺度を作成するなど、手法の調整を積極的に行うように呼び掛けたのである。

ムスリン先生の見解は、既存の心理学に対する批判として機能するものであろう。すなわち、最新鋭のものとして理解されることの多い北米の心理学にも、宗教という面に関して問題が存在するということである。そしてこの指摘は、宗教学的な視点からなされている。より具体的には、宗教という対象を扱う際に、できるだけ複数の宗教を視野に入れ、文化や地域に限定されない形で宗教を把握しようとするという視点である。この見解は、松島先生の提示する3領域の「概念」にまさに当てはまるといえる。つまり研究のベースとなる「宗教」の設定に関する問題点に対処するということであり、当発表はその実例と考えることができるだろう。

## 6. 全体ディスカッション

各人の発表の後、質疑応答の時間に挙げた問いは2つあった。一つは道徳判断の研究をされている先生によるもので、善悪の価値は必ずスピリチュアルな要素が絡むこと、米国で作られた価値判断に関する尺度を検討する際に、「神」がしばしば登場するので文化的差異を修正するのに苦心しているというコメントであった。

もう一つは末田啓二先生の質問で、藤井発表のポイヤーの反直観的概念についての疑問で、ポイヤーの反直観的概念が存続すると言うが、言い伝えというのは単に反直観的なだけではなく、ことわざのように規範として有用性があるか、事実即しているから残るのではないかという指摘であった。これに対して当日十分にお答えできなかった点を補足しながら返答すると、ことわざや歴史などはすでに存続する理由が見出されているものであり、ポイヤーは民話や神話など、フィクション的な表象の存続理由として反直観性を取り上げたのである。とはいえ、宗教を反直観的概念の集合とすることで宗教に含まれる有用性や事実即した面が周縁化されてしまうという末田先生のご指摘はポイヤー説の欠点を描き出しているもののように思われる。この点を踏まえる

ならば、単一の説明に頼らず、複層的に宗教を分析していく視点が必要とされるであろう。

シンポジウムの報告は以上である。他の発表者や聞いて下さった方々はさまざまな印象を抱かれたと思われるが、今回私にとっては初めての心理学会ということもあり、外部の目からの視点も有意義と思われるので、個人的な感想を述べておきたい。

まずは日本心理学会全体についてだが、その規模の大きさもさることながら、発表内容も非常に多様であると感じた。とりわけポスター発表には著名な先生も参加されていたが、宗教に関する発表もいくつか見つけることができた。発表内容については、やはり現場での応用への志向性が最大の違いではないかと思われる。多くの現象についてその効用が指摘され、それが広まることが「役に立つ」という観点が示される。これは一つに、心理学によってそのような効用が実証可能だという点が大いであろうが、対象が宗教となった場合には問題も生じうる。それはムスリン先生が述べられていることであり、すなわち特定の宗教を利することになりはしないかというものである。宗教心理学の応用可能性については、今後議論を深める必要があるように思われる。

次に本シンポジウムに対する感想だが、確かな感覚としては、宗教研究は心理学との結びつきによって利するところが多く、積極的にそれを進めるべきだという印象を得られた。前半2人の発表はどちらも現状の宗教学には欠けている観点を提示しており、なおかつ実証的でもあり、ぜひとも同僚に紹介したい内容であった。他方でその反対の方向性、すなわち宗教学が心理学に何を提供できるかということについては、未だに確信がない。その実例を示してくれているのがムスリン先生の発表だと思われるが、その観点を活かすためにはさらなる検討が必要であろう。いずれにせよ必要とされているのは、宗教学の側の行動と変化ではないかと思われる。この点を今後の課題として研究を続けていきたい。

これまでまったく未知の領域であった心理学の学会で発表できたことは、数多くの発見をもたら

してくれた。最後に、この場を借りてシンポジウム  
にお誘いいただいた松島先生に感謝の言葉を述  
べたい。

## 日本心理学会第82回大会シンポジウム 「宗教心理学的研究の展開(15)」に登壇して

木村真利子(立正大学大学院:非会員)

去る2018年9月25日、日本心理学会第82回大会にて行われた「宗教心理学研究の展開(15)－宗教心理学的研究の最前線－」に登壇させて頂きました。今回のシンポジウムでは、宗教心理学読書会でいつもご一緒させて頂いている先生方との登壇となりました。読書会には様々な背景をお持ちの先生方が集まっており、いつも刺激的な議論が交わされていますが、今回のシンポジウムにもその空気が反映されていたような気がしています。私にとっても今後の宗教心理学の広がりを感じさせてくれる機会となりました。

登壇者の4名のうち、前半の今城先生と私は心理学の立場からの話題提供でした。私は破壊的カルトと呼ばれる、反社会的要素をもつ宗教についてお話させて頂き、続く今城先生は宗教に関わる応用的事例ともいえる職場スピリチュアリティについてお話をくださいました。今城先生のご発表では、宗教やスピリチュアリティが働く人々に与える影響や、人々が「神秘的な力」をどのように考えているかなどについて述べられていましたが、特定の信仰を持たない人々を対象とした調査である点で非常に興味深く聞かせて頂きました。このシンポジウムと同日の午前、白岩先生や松島先生で企画された「日本人が有する素朴な宗教性を考える」と題する公募シンポジウムも開催されておりましたが、そちらでされていた話とも併せて、「日本人の宗教性」あるいは「無宗教の宗教性」について考える面白さ、重要性を改めて感じました。私も破壊的カルト研究を通して、宗教とかかわりを持たなかった人々が、答えの無い問いへの明確な回答や、理不尽な出来事への説明を求めて宗教(それがカルトであっても)とかかわっていく姿をみてきて、人々が宗教的ななにか

や神秘的な力を考えたり利用したりするその"接点"についてよく考えさせられています。今城先生と私はそれぞれ全く違う現場から宗教・スピリチュアリティをみていますが、異なる部分はもちろん、共通してみえてくる部分もきっとあるのだろうと思うと、多様な事象から宗教をみることで生まれる厚みや広がりを感じさせられました。

また、後半では宗教学の立場から、藤井先生、ムスリン先生の話提供がありました。藤井先生が話された宗教認知科学という分野は、先ほども述べた「日本人の宗教性」や「無宗教の宗教性」を考える上でも非常に有用なものだと感じました。記憶として残りやすい反直観的概念が宗教的信念を形成したとする Boyer の論説をはじめ、宗教認知科学の研究テーマの1つとして挙げられた「宗教を生み出す心的メカニズム・バイアス」を探る実験的研究の知見は、(日本人の)無宗教の宗教性を明らかにすることともつながりの深いものであると思います。また、ムスリン先生は、心理学が宗教あるいは宗教と深く関わる死を対象としたときのバイアスの問題、多様性を捉えきれない問題について鋭い指摘をくださいました。宗教という色々な意味で壮大な対象を扱う以上、その定義や概念のもつ多様性について学問的蓄積のある宗教学という分野との連携は不可欠です。このシンポジウムや日頃の読書会でそのような機会を頂けていることを改めて有難く思います。また同時に、キリスト教圏中心といえる現状の宗教心理学の中で、日本の研究者が日本人の宗教性を研究することが担っている役割・意義についても考えさせられます。

今回のシンポジウムでは、心理学以外の学問

との関わり、そして心理学の中でも対象を異にする先生方との関わりから非常に刺激を受けることができました。とりとめのない感想となりました

が、最後に、この度のシンポジウムを取りまとめ下さった松島先生、そして貴重なお話をくださったご登壇の先生方に感謝を申し上げます。

## 「働く人のスピリチュアリティ」が拓く宗教心理学の新たな展開

今城志保(リクルートマネジメントソリューションズ:非会員)

「X社で営業やスタッフ部門でキャリアを積んできたAさんは、現在経理課長を務めている。これから上のポジションに出世する見込みはなさそうだし、経理の仕事が自分の天職であるとは思えない。会社には世話になったし、周囲の人も悪い人たちでもない。ただ、なんとなく毎日が過ぎることに、これでいいのかという不安をやあせり感じている。」

上記のイメージは、多くの中高年が感じているものである。このような働く人の心理やパフォーマンス向上の可能性について研究するのが、私の研究領域である「産業組織心理学」である。宗教心理学とは一見関連しないように思われるが、研究会や読書会に参加するたびに、自分の研究に活かすことのできる知見を学んでいる。今回、松島先生にお声がけをいただき、日本心理学会のシンポジウム(宗教心理学的研究の展開(15))でお話する機会を頂戴した。そこで紹介した研究内容にも触れながら、いわゆる応用分野の研究者にとって、なぜ宗教心理学のもたらす知見が興味深いのかについてお伝えできればと思う。

職場や仕事における研究では、宗教という言葉よりも「スピリチュアリティ」の概念を用いて研究がなされている。産業組織心理学は、他の心理学分野以上に米国が中心であるが、米国では様々な宗教を信仰する人たちが気持ちよく一緒に働くために、一般に職場では宗教はタブーとされているからである。スピリチュアリティは宗教と深い関係があるものだが、ここでは特定の教義や教団とは関係のない精神的なものとして「スピリチュアリティ」という言葉を用いる。

職場におけるスピリチュアリティの研究が盛り

上がりを見せている理由として、たとえば物質主義からの離脱と価値の多様化、企業の社会的責任の重視、変化の激しいビジネス環境と不安定な雇用、グローバル化による東洋思想への興味などがあげられている。働く環境や働き方の変化によってこれまでの就労観が通用しなくなったことで、働く人のスピリチュアリティの重要性が増しているのである。ちなみに職場のスピリチュアリティが高い状態とは、仕事に自己超越的な意義を感じ、周囲の人と価値を共通しつつ、目標に向けて充実感を持って活動する状態と考えられている。

働き方に国や文化による違いはあるものの、日本で働く人にとっても重要な視点は、仕事の意味付けだろう。「なぜこの仕事をするのか」「私の仕事はどのような価値があるのか」という問いは、仕事生活を送る人々にとって、いわゆる存在意義に相当する。「会社にしっかりと貢献し、世の中の役に立つ」という、一昔前に通用した仕事の意味付けは、あまり役に立たなくなっている。転職が増え、以前のように会社へのコミットメントを高く持つことは難しい。日本の会社はジェネラリストを重用してきたため、個人の専門性が定義しにくく、仕事そのものに意義を見出すことも難しい。さらに自分の所属する会社の事業に、価値や意義が見出しにくいこともあるかもしれない。このような状況のもとで、職場のスピリチュアリティの向上はAさんの問題に何らかの解決策を提供できるのだろうか。

日本心理学会のシンポジウムでは、日本で働く人のスピリチュアリティの現状を知り、その効用について、探索的に検討する目的で行った調査結果を報告した。職場のスピリチュアリティ測定



にあたっては、「神」や「信仰」などの言葉を用いない質問項目とした。これは日本人にとって、これらの言葉が特定の宗教との結びつきを想像させることや、一般的な宗教心／スピリチュアリティとの識別が難しくなる懸念からである。調査結果からは、①一般的な宗教心／スピリチュアリティと職場のスピリチュアリティは、緩やかに相関するものの、異なる概念として扱うことが可能である、②職場のスピリチュアリティは、一般的な宗教心／スピリチュアリティを統制しても、主観的幸福感を高める、③職場のスピリチュアリティは、管理職や営業・販売で高く、現業職や運輸・保安で低くなる傾向があり、仕事で「裁量」「責任」「人との接触」といった要素を持つほど高かった。

一般的なスピリチュアリティのように、超越的な存在とのつながりを仕事や職場で意識することは難しく、仮に自己超越的な仕事の意義を感じたとしても、それは社会的意義や集団への貢献に限定される。両者の相違を念頭に置くことは、今後研究を進めるうえで重要である。職場のスピリチュアリティは幸福感を高めたがなぜそうなのか、また前に述べた、仕事の意味付けや職場の一体感などとの関連性は今後の検討課題になる。「裁量」「責任」「人との接触」などの要素は、仕事の意味付けにつながるのか、そのような要素を持ちにくい仕事の場合でも、職場の一体感ではスピリチュアリティを向上させるのかなどにつ

いて、今後検討を進める予定である。

このシンポジウムでは、他に破壊的カルト研究（木村真利子）、宗教認知科学（藤井修平）、北米心理学理論における死と宗教（イーリヤ・ムスリン）といったさまざまな視点からの研究が紹介された。これらの研究は、いずれも職場のスピリチュアリティの研究にとって重要な示唆を与えてくれる。カルトへの入会を促進する心理操作やメンバーシップ維持のメカニズムは、健全な職場のスピリチュアリティ実現の方法を考える際の示唆が得られる。宗教認知科学は、私達が持っている認知的特徴が宗教的信念のみならず、職場のスピリチュアリティの性質やその広がりをもどのように促進・阻害するのかの理解につながる。北米心理学における宗教や死の理論化における文化や歴史の影響を認識することは、米国における職場のスピリチュアリティ研究の知見を参照する際の参考となる。前述したように、スピリチュアリティと宗教は不可分の関係性にあり、宗教や宗教心理学はより深い知見を提供してくれる。

Aさんが、仕事に意義を感じ、職場の仲間と一体感を持って仕事ができるようになる（本人がそう望めば、であるが）ことを可能にするための研究は、今後さらに注目されると考える。宗教心理学の研究を大いに参考にしながら、将来的には宗教心理学研究に何らかの還元ができるように、今後も研究を進めていきたい。

## 美しきフクロウ

ムスリン・イーリヤ（日本大学グローバル社会文化研究センター）

今朝起きたら、北海道のある神社に、9月に起きた地震の直後、夏を別の場所で過ごしていた守り神が例年より早く境内に戻り、神職や参拝者に余震などに対する安心感をもたらしてくれたという内容のニュースを見た。この守り神とは、二羽の白くて美しい蝦夷フクロウらしい。

私は宗教学者で、宗教を扱う心理学的研究に関心がある。そして、心理学者が宗教をどう捉えているのかといった、心理学者の宗教観を自身

の研究の対象にしている。そのような研究をしていく中で、宗教についての様々な論文を読んできた。宗教を対象とした心理学者の議論には、社会学や文化人類学の宗教に関する研究成果を読むことが多い宗教学者から見ると、極めて基礎的な問題が付きまとう。というのは、例えば、「神」という概念は宗教や文化によって異なり、同じ宗教でも時代や宗派、それを信じている社会層などによって異なることが多々あるが、このことは心

理学的研究では忘れられがちであるように感じる。

それは、もちろん無理もない。心理学の専門家の間に宗教に関する社会学や文化人類学の研究を扱うコースを履修した方々は少ないであろう。また、特定の宗教の教義を細かく勉強されたことのある心理学者も比較的少ないだろう。宗教学者が心理学における実験や統計学的研究に詳しくないのと同様である。

また、近年の日本では世俗化が進み、宗教離れが起きているのみならず、オウム真理教によるテロなど、宗教がらみの国内事件や海外の宗教をめぐる紛争などによって、宗教は、特に若者の間で、社会的に有害なものとしてさえ見なされるようになってきているという意見をよく耳にする。宗教が持つ社会的・心理的影響が減少しているということから、宗教自体は心理学研究者に周縁的な存在として認識されており、宗教紛争の背景にある動機やいわゆる「マインド・コントロール」、カルトの研究などが盛んとはいえ、全体的に、日本の心理学者の宗教への研究関心が低いという時代思潮も影響しているかもしれない。

ただ、私が本稿で特に指摘したいのは宗教の多様性に関する意識不足のもう一つの原因である。それは、アメリカの専門誌に載った研究が何事においても必ず参考になる最良のアプローチで、全人類に通用する事実に関する客観的な成果を提供するものだという、我々日本で研究している学者による過剰評価である。というのは、心理学のみならず、どの分野にせよ、我々学者はアメリカやイギリスで出版される専門誌に掲載された論文に注目し、その中身を最先端で最も価値のある学問として認識する傾向がある。いや、それこそ科学だとさえ考えるのである。世界に対して研究成果を発信したければ、英語で論文を作成し、それをアメリカの専門誌に投稿しなければならない。そうしなければ、世界だけではなく、日本国内でさえ一流の研究者として認められない、あるいは科研費が取れない、という雰囲気になっている。おまけに、アメリカの専門誌に掲載された尺度などに従わなければ他国の研究者と自身の研究結果を比較することができないという問

題も出てくる。日本で研究を行っている我々を含め、様々な意味で全世界の学問がアメリカを中心に公転していると言っても過言ではない。そこで我々も、宗教性のタイプや宗教信仰と精神健康、あるいは宗教とアイデンティティ、宗教と人格形成、宗教信念と幸福・死への不安・意味など、様々な問題を研究しようとする際、まず北米の専門誌に目を向け、そこでの問題提起や研究方法、成果などを確認する。そして、上記の、学者として認められたい、研究に必要な資金を獲得したい、あるいは、世界に通用する結果を発表したいという現実的なニーズにかられて、我々は北米の専門誌に掲載された問題提起や調査票や尺度の構造、場合によって、最後の一文字までその内容も、そのまま、コピーしてしまうようなことをしばしばする。

それもそのはず、アメリカの専門誌は世界的な権威である。だけれども、宗教に関して言えば、日本の宗教を研究対象にしつつ、アメリカなどの西洋研究者のアプローチや方法の真似をしようとする場合は、我々は大きな過失を犯さざるを得ない。何故なら、例えば、アメリカの研究の中で利用された調査票や尺度の内容に従いながら自らの日本についての研究を組み立てる場合、「神」と書いただけで、(対象者が日本のキリスト教徒ではない限り)我々はすでにアメリカの研究者と相いれない結果を得る方向に向かっているからである。北米の専門誌の中に出てくる「神」とはフクロウであり得ないからだ。

西洋の研究者が宗教研究を行う際に頻繁にイメージするのは、人間の能力や道徳性をはるかに超える全知全能で完璧な道徳者の神である。北米心理学の論文にその神のことが God と書かれるのは偶然ではない。その言葉を見れば、まず頭文字が大文字であることに気付くことができる。この書き方にはわけがある。神は非常に貴く、強力であり、人間とはかけ離れた存在であるため最大の敬意を示す必要があるわけだが、その敬意を神という名詞を大文字で書くことで表すのである。それから、英語などの印欧語の名詞には単数形と複数形があるが、ここで単数形の名詞が使われている理由は神が一つしか存在しな

いと信じられているからだ。英語の名詞には性別がないので、God と書いても信仰対象の性がはっきりしないが、名詞に性別が付くほかのほとんどの言語ではキリスト教の「神」は男性形になっている。つまり、異なる解釈をしている神学者や聖職者もいるとはいえ、西洋では神は人々からかけ離れた、人間をはるかに超える、唯一の存在、そして男性としてイメージされ、信仰されることが多い。

しかし、日本では、フクロウのような動物のみならず、木々や稲などの植物も人間も神に成り得る。前述したように、日本ではどうやら、人間に近い場所に住む複数のフクロウが身近な存在として、その性別に関係なく拝まれているようである。これだけ神概念が違えば、アメリカの研究者の尺度の中に出てくる神像、神との関係などに関する質問項目が日本で同じ意味を持ち、似たような研究結果を生み出すことは不可能である。このことは、落ち着いて考えれば誰もが簡単に理解できるが、それにもかかわらず、我々はアメリカの専門誌の調査票や尺度をそのまま受け入れ、日本の現実を捉えきれない不正確で紛らわしい、もつと云えば疑わしい研究に着手しがちである。

それには、上記の、アメリカ専門誌に対する職業的な依存や、最新で最も価値のあるとされるアメリカの学問に対する崇拝ともいえる態度が関係していると思われる。そして、言葉の問題も関わっているように思われる。というのは、私は日本人ではないが、God を「神」と訳して自分たちの研究をアメリカの質問票にもとづいて行う際に日本人心理学者は、美しいフクロウも「神」に含まれていると意識的にまたは無意識的に考えているかもしれないが、それでもその中には、アメリカの研究手法と成果が日本の宗教に当てはまらないこと、そして、「神」との関係などに関する質問項目に答えた日本人対象者の回答がアメリカのそれと比較にはならないことを気付かない、もしくは失念している方もいらっしゃるのではないかと云うような気が時々する。

アメリカの心理学には、複数の神々あるいは祖先の霊、運命など、唯一神ではない存在を信奉している人たちが世界中に大勢いるにもかか

わらず、全人類の普遍的な心理として、すべての人間には God を求める無意識な宗教性が備わっていると考える論者がいる。また、多くの宗教で信仰対象が道徳的に両面的・両価の神であるにも関わらず、宗教全般の発生や存在の理由を、社会的秩序を守るために人間の道徳的悪さを監視し、処罰する道徳的に欠点のない審判者のような神への信仰が必要だった、というような議論で説明する研究者もいる。だが、そう考える必然性はなく、文化人類学的な研究などからわかるように、そのような議論は宗教あるいは宗教性に関する正しくて揺るぎない説明というよりも、宗教や宗教性の一つの捉え方でしかない。そこには自身の文化の神概念や道徳概念を宗教全般あるいは道徳全般として見なす誤認が見られるが、その誤認の原因は宗教の多様性に関する理解が不足していることや研究者自身の信仰もしくは宗教的こだわりにあるのではないかと私は考える。アメリカの心理学分野の専門誌の中の宗教研究は、必ずしも客観的で全人類普遍的な成果をもたらした、我々がどうしても見上げるべき研究ではない、このことを念頭に置く必要があると思う。

宗教の多様性に関する意識が不足して God をあらゆる宗教信仰の原型あるいは本質として捉え、一神教を宗教全般と同一視するのが(一部の)北米心理学者が抱えている問題である。だが、そのような見方を持つアメリカの研究者の論文を宗教研究の権威として捉え、彼らの自文化中心的な考え方に基づいた研究手法や成果を我々が無反省に、必要な変更を加えずに導入すると、文化的多様性に関する意識の欠如は我々の問題にもなる。知らず知らずのうちに偏った学問を輸入したということになるからである。そして、その問題は宗教と宗教に関する学問に限ったものではない。というのは、一神教的概念を宗教全般として、アメリカなどの西洋社会における宗教性や道徳の概念を全人類の普遍的な宗教性・道徳性としてそれぞれ捉えてしまうと、我々日本で研究している者たちは特定の時代、特定の社会の産物でしかないアメリカの研究者の人間観を普遍的なヒト種の心理として誤認してしまう。も

しそうなったら、我々がやろうとしている宗教心理学が(日本を舞台にした)アメリカ人の宗教心理学の研究になってしまう。

そのため、宗教信念や実践の精神健康への影響を特定しようとする場合、宗教を対象にしなから道徳性や人格の形成を考える場合、あるいは宗教と死への不安などに関する質問票や尺度を作成する場合は、日本とアメリカ、東洋と西洋の文化的相違を十分意識し、日本の宗教や文化において培われてきた世界観や価値観を反映した、日本の文化的文脈により適った尺度や調査票を作成する必要がある。

これはただ単に日本のことを紹介してほしいという意味だけではない。上記の議論にもあったように、アメリカ的な概念や価値をそのまま日本の宗教を対象とした尺度や調査票に反映させることで得られた相関性などは、例えそれがアメリカの専門誌に円滑に承認され掲載されることになったとしても、日本の宗教事情に異文化の概念を強引に応用したということになるため、日本の現状を正しく捉えたとは考えにくく、一種の学問的・文化的覇権へ同調したとも考えられるという点でも、宗教研究を進める時に北海道のフクロウを思

い出して、日本人の世界観を自らの研究に反映させることを怠らない必要があるわけである。

確かに、日本の文化に合うように尺度などの調整をしましょうと言うのは易しいが、行うのは難しい。計量的研究の場合、尺度の信頼性を確保し、その妥当性を確かめるためには複雑な手順が必要で、時間がかかる。また、アメリカの心理学専門誌に対して文化的相違点を主張し理解してもらうことも、場合によっては、煩わしいやりとりを意味し、多少勇気も要るかもしれない。そのため、日本の宗教あるいは宗教そのものを心理学的な立場から正確に捉え、海外に伝える試みは、かなりの努力や工夫が必要であろう。そこで、宗教学者と心理学者の間の密接な協力や助け合いが一つの有効な手段になると思われる。

上記の論点は先般の日本心理学会で私が指摘しようとしたことであり、フロアの方からも理解を得られたようである内容である。本稿においてはその発表の主なメッセージをよりわかりやすく、より具体的な形でまとめようと試みたのである。書いているうちに、そばに美しい蝦夷フクロウがいてくれればもっと良いものを書けたかもしれないとふと思った。

## 「宗教心理学的研究の展開(15)」感想記

白岩祐子(東京大学:非会員)

2018年9月、仙台で開催された日本心理学会第82回大会のシンポジウムに出席しました。15回目を数える今回は「宗教心理学的研究の最前線」をテーマとして、カルト、職場、認知科学、北米研究の趨勢という4つの切り口から新しい動向が紹介されました。

木村真利子先生による「"破壊的カルト"研究の動向」では、マインド・コントロールを特徴づける各指標を教団別に比較したご研究を興味深く伺いました。身元を隠して近づく「欺瞞性」、恐怖喚起によって脱会を防ぐ「賞罰」、団体批判を封じる「批判抑制」など、およそ正当、民主的とは言い難い手法が固有にみられたのは論争的カルトで

あることを、一般的なキリスト教団体(統制群)との対照比較によって明らかにされた点が、実証研究としての大きなアドバンテージであると感じました。わが国のマインド・コントロール研究を牽引してこられた西田公昭先生のご研究を、その教え子である木村先生が方法的・概念的に精緻化・拡張し、知見を確かなものとしていく過程は見ごたえがあります。その中で一点、「対人魅力」のほかに特徴がなければならぬ宗教団体ではなくサークル・同好会でいいはずなのに、なにゆえ人々はそのキリスト教団体(統制群)に所属しているのだろう」との疑問が生まれました。もしご研究で分かっていることがあればまた教えていただけ

ると幸いです。

今城志保先生の「職場におけるスピリチュアリティ」では、おそらく日本の職場で実施されたはじめての大規模調査の概要と結果をお示いただきました。「真正性」と「職場スピリチュアリティ」「スピリチュアリティの障害」という3つの因子が職場スピリチュアリティの下位概念として抽出され、このうち前者2つが主観的幸福感に正の効果をもつという結果は、職場環境をデザインするうえで、今後わが国でも職場スピリチュアリティという概念の導入が不可欠であることを示す画期的なものであり、後続研究の起爆剤になるものと感じます。今後のご研究では、「真正性」などの概念をさらに直観的にイメージしやすくしていただければ、というお願いと、「職場スピリチュアリティ」と既存の類似概念(たとえば有効性感覚)との質的な差異を知りたいです、とのリクエストを出させていただきます。

「宗教認知科学ー心理学と宗教学の共同研究の現状ー」を報告くださった藤井修平先生は、宗教学の研究アプローチの種類、検討対象、「宗教を心理学すること」と「宗教心理を研究すること」の差異などをごく平明に図式化したうえで、同領域における5つの潮流をいくつかのキーワードから素描してみせてくださいました。そのなかでもとりわけ、「子どもは生物が死んだ後も、認知能力は存続すると考える傾向にある」という Bering & Bjorklund (2004) のトピックが個人的に興味深く、1) こうした特徴と(同じく子どもに特徴的とされている)アニミズム傾向との関連は実証さ

れているのだろうか、2) もしそうであれば生物・無生物・元生物はそもそも区別されていないと理解していいのか、3) 感じる能力ではどうか、などの点を詳しく知りたい、との関心を覚えました。

ムスリン・イーリヤ先生の「近年の北米心理学における宗教研究の現状と課題」では、1) 社会心理学でもよく知られた「恐怖管理理論」、2) 恐怖管理理論への批判的考察から提唱された「意味管理理論」、3) 不死欲求を充足する機能を宗教に認める「宗教の合理的選択理論」、4) Bowlby による愛着理論の神への応用、といった主たる研究動向の要旨を分かりやすくレクチャーいただきました。ムスリン先生はさらに、こうした心理学研究の限界・課題として、「それぞれの理論は"死"という本来多面的な現象の一側面しか扱っていない」点を挙げられました。ご指摘の点はおそらく(実証的な手法を採用する)心理学研究全般に当てはまる特徴であり、心理学が実験・調査データからモノを言う限りこうした限定性は方法論的に宿命づけられていると感じました。人間の心の営みの一局面に対してはマニアックな知識を量産する一方で、それらを含めた総合的な人間像の構築に弱い、という心理学の実証科学ゆえの弱点を補完するものとして、宗教学を位置づけることは望みすぎでしょうか、という問いかけをもって感想記の筆をおきたいと思います。

最後になりますが、宗教心理学研究会発展のために長年力を尽くしておられる企画者の松島公望先生に改めてお礼申し上げます。

## 我が国における宗教心理学の独自性を目指して

末田啓二(甲子園短期大学)

はじめに

今回も公募シンポジウムに参加させていただきましたが、年々議論が活発になっているような感じがします。参加人数が増加したこともあってでしょうが、いろいろな論点や視点からの質問や疑問が寄せられ、この分野での関心の高まりが実

感できました。私は同じ研究会の公募シンポジウム「日本人が有する素朴な宗教性を考える」の中で、アニミズム心性について報告しましたが、私の視点から宗教心理学的研究の展開(15)についてコメントを提示させていただきます。話題提供者の方々はそれぞれ明確なメッセージを伴っ

た研究報告をなされ、4名の話題提供者の人選がとてもの確であったことが印象的です。まさに宗教学と心理学のせめぎあいを期待する企画者の意図が読み取れるからです。企画者の松島先生が企画趣旨で述べられていたように、「概念は宗教学や哲学が担当し、その概念を実証するのが心理学である」とのモデルとなる研究が、この4名の発表なのかもしれません。

### 話題提供者へのコメント

今日 evidence based data based が声高に叫ばれ、実証性が強調されていますが、心理学における実証的とはどのような内実をもったものなのでしょうか。心理学は古くは哲学の命題を自然科学的方法で解明するところから始まりました。したがっておよそ心理学を標榜するからには実証性を重んじるのは当然でしょう。しかし自然科学における実証性と心理学における実証性はそのレベルが全く異なります。例えば化学実験などではデータの測定誤差は極めて小さいのが普通です。勿論資料や溶剤などの純度が高いこと、測定器具の精度が高いことなどの条件が揃えばの話ではありますが。結果の再現性は、心理学では5%や1%などの有意水準で示されますが、逆に言うと100に1つや2つの例外があって当然という考えや感覚があるからに他なりません。それだけ人間を研究対象にする上では、個人差は勿論、無数にある環境要因のコントロールが難しいことが暗黙の了解となっているからです。そのため実証性にも大きな幅やレベルがあり、研究分野によっても大きな違いが認められます。実際、心理学領域には実証性・理論を重視する実験系の基礎心理学から、臨床心理学のように、個別性を重視する分野も見られます。これまではどちらかといえば、具体的で実証可能な研究テーマが多く選ばれ、多くの要因や種々のバイアスが入る学際的研究は敬遠されてきました。このように心理学のテーマ選択には一定の枠がはめられるのが普通で、抽象度の高い概念やテーマを自由に設定できる哲学や宗教学とは対照的です。

その意味では木村先生が取り上げられた「破

壊のカルト」研究、そして今城先生の「職場におけるスピリチュアリティ」は実証的研究に極めてなじみやすい研究と思います。扱われる指標や変数も極めて具体性を持ち、統制群も明確で、心理学研究としてオーソドックスなパラダイムが用いられています。

それに対して宗教学から藤井先生、イーリヤ・ムスリン先生のご発題をお聞きしましたが、とても印象に残ったのが以下の2点です。

1つ目は宗教学がCSRに代表されるように、認知科学的視点を取り入れ、心理学にかなり接近してきたことであります。2つ目はムスリン先生が指摘されるように、心理学においてキリスト教的バイアスが北米の研究の中で反映されていることです。これはP.ポイヤーの「反直感的概念は記憶と伝達されやすい」との仮説にも反映されている感じがします。なぜならキリスト教信仰の中核が、処女受胎であり、復活であり聖霊降臨であり、いずれも直感的概念に反するからです。この仮説を他の文化や宗教に適用したら、例えば日本のような多神教の文化に当てはめるとどのような結果になるのでしょうか。検証の価値は十分あるでしょう。いずれにせよ宗教学と心理学は、かなり共通する概念や方法論を有するようになったことが明らかにされました。

### 学際的性格の宗教心理学

学際的研究では分野の異なる者同士が、ある時は前提をも否定するような批判を生んだり、逆に異なる分野から目からウロコのような新しい示唆が与えられたりします。また学際的研究にはそれぞれの学問分野や研究領域で互いの妥協が必要になることが多く出てきます。それらをどのように調整するか、それとも各領域を統合・包括するような上位概念が見出されるかが課題となります。この課題解決に1つのヒントを与えてくれるのが、それぞれの領域や分野の究極の目的に目を向けることです。例えば宗教学では宗教とは何か、なぜ存在するのか、などであり、心理学では人間とは何か、その内面にはどのような力動性が働いているか、などです。したがって宗教心理学では人間存在の原点、宗教の起源などに

ついでに追求が研究の出発点になるのではないか。宗教という概念が最初から存在したわけではなく、日常生活の中から生じるいわゆる宗教性や宗教的行為などを、現象的に捉える試みが求められます。宗教学にも迷信的行動や社寺への参拝、慰霊行為などが研究対象にされているよう

に、これらの行為やいわゆるスピリチュアリティが、やがて民族宗教となり歴史上生まれては消えていく中で、ごく一部が今日、既成の宗教として存在しているのでしょう。今後の研究にはこの宗教の元型(アーキタイプ)や起源にも焦点を当てることをお勧めします。

## コラム 関西地区勉強会だより NO.4

### — 新しい時代を迎えるにあたって —

関西地区勉強会世話人 中尾将大(大阪大谷大学)

今年で約 30 年続いた平成が終わります。4 月 1 日には新しい元号が発表されることになりました。次の時代がどのような時代になるか。我々はそのようなことも念頭に置いて活動してゆかねばならないことでしょう。私の研究領域のひとつに真宗学がございまして。ご存知のとおり、浄土真宗は「絶対他力」と申して、己の限界、至らなき(煩悩)に気づき、翻って阿弥陀如来の救いの働きを信じ、その働きに己のすべてを委ねて歩む仏道であります。近年、浄土真宗における篤信の在家門徒にまつわる書籍が相次いで出版されるようになりました。多くの人々が浄土真宗の御教えを拠り所として、懸命に人生を生き抜いた市井の名も無き篤信者たちの人生に共感し、尊敬を寄せている証左ではないでしょうか。この傾向について私がお世話になっている真宗学のある先生は、「これまで、現代人は科学技術を頼みとして、自力を頼んで歩もうとしてきたが、その価値観に限界が生じてきているのではないか。そして、自己を超越した大いなる存在による魂の救済ともいべきものを求めるようになってきたのかもしれない」と語っておられました。また、僧侶でカウンセラーをされておられるある先生も、「最近カウンセリングの中に宗教ナラティブを取り入れても、クライアントは一頃と比べてあまり抵抗がなく、悩みごとまつわる諸症状が和らいでいくことが多くなってきたと感じている」と語っておられました。

私は次の時代には、このような物理的次元や因果律を超越した価値観が益々求められてくる

ようになるのではないかと感じています。心理学で申すところの「シンクロニシティ」や「超因果律」といえるものなのかもしれません。多様化が進む現代社会の中で我々は自己の存在の意味や人生の意味について改めて考えるようになってきたのだと思います。私のこれまでの研究の歩みの中で見出してきた人間の苦悩の最たるもののひとつは「自分が生きている意味が見いだせない」、あるいは「自分の価値が実感できない」というものではないかと思っています。一方で、人生の意味や生きる意味は千差万別であり、そのようなことを追求すること自体が無意味ではないかというご意見もあることでしょう。しかし、自分なりの人生の目標、人生の目的と使命というものがあったほうが安心して、自信を持って人生を歩めるのではないかと私は考えています。これまで経験して来た辛い経験や恥ずかしい思い、あるいは肉体的・精神的苦痛の中にも実は、このような隠された意味があったのだ。あるいは、色々な人やもの、状況や場所との出会いを得て、「自分はこのためにこれまで生きてきたのだ」と思えるような体験があれば、なにか救われるような感覚が得られるのではないのでしょうか。

そこで、関西地区勉強会では今年から「ワークショップ」という新たな活動を提案し、手始めに「人生の意味について考える」というテーマで実施したいと考えています。もちろん、ワークショップ当日にご参加いただけない先生方からも事前

えさせていただこうと考えています。これまで関西地区勉強会では、肩残らないサロンのな雰囲気醸し出しつつ、メンバー間で行われるざくばらんな「語り」を重視してきました。今年はさらにこの点を強調し、様々なテーマを元にワークショップという新しい試みを実施してまいりたいと思います。研究会内外からテーマを募集し、あらゆる

テーマについて思考し、意見交換を行うことで、参加者おひとりおひとりがご自分の研究に何らかの刺激を受けたり、ヒントを見出されたりすることを願っています。どなた様もお気軽にご参加いただけたら幸いです。これからも関西地区勉強会をよろしくお願い申し上げます。



## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 29 号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第 82 回大会公募シンポジウムの報告および発表者・参加者からの感想となっております。今号も非常に充実した内容となっております。ニューズレターを通して、宗教心理学的研究が持つ可能性を検討し、さらには日本における宗教心理学的研究の新たな展開について考える機会となれば幸いです。

ニューズレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

### [宗教心理学研究会の今後の予定]

2019年9月11日(水)～13日(金)

日本心理学会第83回大会公募シンポジウム(第16回研究発表会)開催

会場:立命館大学大阪いばらきキャンパス

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[ psychology-religion@office.so-net.ne.jp ]

研究会ホームページ管理・運営

担当:藤井修平[ yrsk.f@nifty.com ]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)